

口頭説明受け手意識尺度の構成概念の検討と妥当性の検証 —説明文章研究から得られた知見に基づく心理尺度の検討—

辻 義人 (公立はこだて未来大学)

キーワード：説明活動，口頭説明，確認的因子分析

問題と目的

わかりやすい説明活動に求められる能力とは何か。また、その指導は可能なのだろうか。これまで、説明活動に関する多くの検討がなされてきた。しかしながら、それらの多くは説明文章を対象としたものであり、口頭説明に関する検討は限定的であった。辻(2018)は、読み手意識尺度(Audience Awareness 尺度:AA 尺度)の妥当性検証を通して、改訂版 AA 尺度の提案を行い、わかりやすい説明活動の背景要因について検討を行った。しかし、改訂版 AA 尺度には説明文産出と口頭説明の両場面が混在しており、必ずしも口頭説明に適した構成概念ではない。このことから、本研究では、口頭説明に注目した構成概念の検討と妥当性の検証を実施する。

方法

調査は2020年1月に実施した。被験者は大学生97名であった。改訂版 AA 尺度に基づき、口頭説明場面に着目した質問項目(16項目、5件法)を作成し、被験者に回答させた。得られた結果について、探索的・確認的因子分析を実施した。また、被験者4名に口頭説明課題を実施した。

結果と考察

構成概念の検討 探索的因子分析(最尤法,プロマックス回転)の結果より、2因子が抽出された。第一因子は、他者や自分自身の説明のわかりやすさへの注目、また、聞き手に説明を合わせる意識など、口頭説明のわかりやすさへの注目と意識に関連する項目が見られたことから、「わかりやすさ志向因子」と命名した。第二因子は、聞き手の反応に合わせた説明内容や表現の修正、また、聞き手の理解状況を把握することなど、口頭説明をモニタリングし調節する項目が見られたことから、「説明調整因子」と命名した。なお、両因子への負荷量が低い1項目、また、1項目で1因子を構成した2項目を除外した。探索的因子分析の結果に基づき、本尺度について「口頭説明受け手意識尺度」と命名した。続いて、確認的因子分析による因子構造モデルの検証を行った。適合度検定の結果より、「わかりやすさ志向因子」における因子負荷量が低い3項目を除外したモデルについて、良好な適合度指標が確認された($\chi^2(34)=36.486, p=.35, GFI=.934, AGFI=.894, CFI=.982, RMSEA=.028, RMR=.062, AIC=78.486$)。この結果より、本

尺度の構成概念として、2因子構造(各5項目)であることが確認された(Table 1)。

信頼性と妥当性の検証 クロンバックの α 係数による信頼性分析を実施した。その結果、第一因子は $\alpha=.667$ 、第二因子は $\alpha=.668$ 、尺度全体は $\alpha=.668$ の結果が得られた。妥当性の検証に際して、本尺度における高群被験者4名に、異なる対象(小学校教員、小6児童)に向けたビデオ説明課題を実施した。説明内容と表現方法に注目して比較を行った結果、説明対象間において違いが見られた。しかし、この説明課題は口頭説明をビデオで撮影したものであり、対面での説明活動ではない。また、本尺度の高低間における説明内容と表現を比較したものではない。今後、妥当性の検証に際して、これらの検討が必要である。

結論

説明文章産出に関する改訂版 AA 尺度に基づき、「口頭説明受け手意識尺度」の構成概念の検討を行った。今後、本尺度の妥当性について、より詳細な検討を行う必要がある。

Table 1 口頭説明受け手尺度の検討結果

#	項目
1	他者から口頭説明を受けて「わかりやすい」または「わかりにくい」と感じることもある。
2	自分が口頭説明の聞き手であることを想像して、自分の説明がわかりやすいか注意している。
3	説明の聞き手に合わせて、表現や言葉づかいを変えたほうがよいと思う。
4	相手の口頭説明を聞くとき、わかりやすさを意識している
5	自分が口頭説明を聞いてわかりにくかった内容は、自分なりの表現に置き換えて口頭説明するようにしている。
6	説明の聞き手の表情や反応の変化に注目し、それに合わせて説明内容や話し方を変えている。
7	口頭で説明するとき、聞き手の反応に合わせて、説明内容を省略することがある。
8	口頭で説明するとき、聞き手の興味や関心に合わせて伝え方を工夫している。
9	口頭で説明するとき、聞き手がどこまで理解できたか、確認するようにしている。
10	説明の聞き手に合わせて、説明内容や伝え方を変更することがある。
	#1~5: F1「わかりやすさ志向因子」、#6~10: F2「説明調整因子」、因子間相関 $r=.31$